



TITLE:

中書檢正官：王安石政權のにないて  
たち

AUTHOR(S):

熊本, 崇

---

CITATION:

熊本, 崇. 中書檢正官：王安石政權のにないてたち. 東洋史研究 1988,  
47(1): 54-80

ISSUE DATE:

1988-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154231>

RIGHT:

## 中 書 檢 正 官

——王安石政權のにないてたち——

熊 本 崇

序にかえて

一 安石の中書改革——「吏事」と「吏才」

二 中書檢正官——新進官僚

三 中書への權力集中——檢正官の兼職

四 神宗親政下の檢正官

結語にかえて

序にかえて

鄧綰という男がいる。成都雙流の人で進士科及第ののち熙寧三年（一〇七〇）には、寧州（陝西永興軍路）の通判であった。青苗・免役等の新法をまのあたりにして、美辭をつらねた上書を奉呈し、王安石にも書と頌とを送ってこれに阿った。急遽安石は彼を中央へ召喚し、顯要への陞進の期待にあふれながら鄧綰は開封へのぼる。家屬を同道したかを安石が問う。召致が急でもあり次のポストがなになるか判らないため、單身急行したむね綰が答える。「どうしてつれてこなかったのか。君は故官（寧州）に歸らないのだから。」安石にいわれて陞進の期待は確信にかわる。だが彼の人事は、安石が致齋の休暇で出仕しないうちに進行する。陝西に詳しい履歷をかわれてわりあてられたのは、寧州の知州である。期待

が期待であつただけに彼の失望は大きい。不平をならす鄧綰に人が問う。「君はどんな官ならなつてもいいというのか。」  
 「館職になつていけないわけがない。」「諫官になれないだらうかね。」「それこそなつてしかるべきだ。」「翌日下されたのが中書檢正孔目房公事官の命である。出府してより以來その傲慢から郷人との交際を絶つていた彼に、この時とばかり同郷人の笑罵が集中する。彼は應酬する。「笑罵はあんたの笑罵にまかせる。好官は、私はかならずなつてみせる。」「(長編」216/2、この條は司馬光『日記』による)

それからほぼ五年が経過する。檢正中書五房公事(都檢正)から更迭された李承之の、後任を誰にすべきかの議論が神宗の御前であつた。宰相韓絳はいう。「都檢正は奏事をしないだけ、執政と異なるところはありません。」「參知政事呂惠卿がいう。「だからこそ李承之は臣等<sup>わたくしども</sup>に對し、帥(安撫使)となるのをよろこばなかつたのであります。そのうえ臣が都檢正から執政となつたので、人は檢正官を要路とみなしております。」「(長編」213/28)

五年の間の、中書檢正官における變化は著しい。司馬光の傳える五年前の鄧綰は、新法黨官僚のあしき要素を體現している。上書にみられる無節操、美官に對する貪欲などがそれである。その彼において美官とは、あくまで館職・諫官という文筆の能を示し辯舌の才を誇りうる、從來人に清要とみなされてきた地位である。孔目房檢正官は彼の自負に對する侮辱でしかない。五年後の彼は御史中丞に就任しえて、好官は確かに獲得できた。が一方では皮肉にも、彼の嫌惡した檢正官に對する評價は、ある意味で彼の地位より以上のはやきで、格段の上昇をとげた。まぎれもなく官界の要路であり、その長である都檢正ともなればほとんど、宰相クラスにも匹敵するという。

# 一 安石の中書改革——「吏事」と「吏才」

改革者王安石が宰相就任以後、圓滑にその施政を推進するためには、宰相府中書省が刷新されていなければならなかつた。彼の就任にさきだつば二年前にすでにその意志の片鱗が窺える。「中書では事が煩雜をきわめています。もし早急

に「中書に」宰屬を置き、雜務一般を下級官廳に移管しなければ、統治できるわけがありません（『宋會要』職官5／8）。神宗生日祝賀の儀禮を、先帝の服喪中と同様にはこぼうとした有司の不手際があった。これを看過した中書の失態を認めながらも安石はむしろ、雜務に拘束される中書の實狀に、神宗の注意をむけようとする。

かくて編修中書條例司が創設された。この委員會の編修官にまず任命されたのが李常とそして呂惠卿である。ふたりはともに制置三司條例司―初期新法財政政策の企畫立案委員會―檢詳官との兼任であった。續いて俞充・李承之・鄧潤甫・張琥・曾布らが任命される（『宋會要』職官5／9）。やがてこれらの名のほとんどは中書檢正官として現われることになる。しかも多くの場合編修條例司を兼ねながらである。その人事からみても編修官と檢正官とが、政治中樞の刷新という共通した目的、これに對する強い欲求から派生したものとは、容易に推察できる。特にのちにはおもに後者が「宰屬（又は宰掾）」とよばれるのだから、安石構想においては、檢正官が編修官の發展形態であるとも理解できる。

神宗のことばかりれば「事の有司に歸すべきものはこれに歸し、中書は〔有司のなすところの〕當否を責する」とどめ「大臣に政事の大なるものを講明することを得」（『宋會要』職官5／11）させる、これが條例司のめざすところである。宋初以來官僚數が増加しその制度も複雑化した。滞積し續けてきた膨大な雜務から解放し、行政の最高機關にもとめられる機能性を回復して改革への餘力をもたせるべく、もくろまれたのである。惠卿らが任命されてのちはば一年、條例司は「まさに有司に歸すべき二十二事」を上呈する（同5／10）。安石構想がひとまず軌道にのったといえる。

熙寧三年（一〇七〇）九月檢正官が設置されたのと同じ日に一方では、中書省の胥吏（堂吏）にも改革が加えられる。事務に習熟しない守當官・主事・錄事などの十のポストが削減され、留任を認められた錄事以下にはその俸給を増すみかえりに、「倉法」を適用して取締りを強化し、かつその成績の査定を嚴重にするなどの措置がとられた（『長編』215／1）。同じ十一月には編修條例司曾布らによって「中書吏試補及功過陞降法」三九條が定められる（同217／7）。試験制度、能力と実績の重視がその骨格である。安石は神宗にいう。「中書の事を省こうとするならば、〔堂吏を増すのではなく〕吏を選補

する法を修めなければなりません（同211／20）。」條例司によって整理しえたのちの、中書において必須の一般事務は、當然これを胥吏に委ねるにせよ、あくまでその胥吏は精選され、職務の遂行も厳しく監督されなければならない、という認識である。

この年の末參知政事から安石は宰相となる（『長編』211／9）。名實ともに最高責任者として政治の革新にのりだすにあたり、ふたつの條件、據點となすにたりる機能的行政府と、有能な實施面での補佐官——中書檢正官——とは、とりあえずすでに満足されようとしていた。

制度上從來中書において宰相に直屬する事務官は、五代以來の中書堂後官や、のちにその上位におかれた提點五房公事である。制度が簡略かつ實質的であつた國家草創期には、堂後官の一部に士人を補す方針が確乎としてあつた（『宋會要』職官3／22）。胥吏のみを用いればその專權を防ぎがたいがための措置である。のちにも士人を任用すべしという事例は散見するが（同職官3／24など）、その事實はかえって、壓倒的に任用されるものの主流が胥吏であつたことを推量させる。それでも一方ではある程度、繼續的に士人も用いられたであろう。曾公亮はいう。「丞相府（中書省）には敦樸の人を用いるべきであり、だからこそ本朝では進士を用いず學究を用いたのであります（同職官5／8）。」さきにふれた熙寧初、宰屬をおくべきことが議論された際の事例である。「學究」は進士科に對する諸科の總稱で、經書の字句の黯記能力しか試験されない、同じく科擧及第者であるにしても、「進士」とは峻別される存在である。胥吏でなければ士人とはいえ、有能な實務官僚というよりは實務ともいえぬ所與の書類仕事を、ようやくこなしうるよくて敦樸だけがとりえの事務官たち、既存の制度ではこれらが率ね、行政の實務を遂行する際宰相に與えられた屬僚である。

承平のときであればともかく、なによりも最高責任者の強力な指導のもとに、下級諸機關に確實にその意志を實行させたい非常時には、如上の事態は深刻な缺陷として有識者に意識される。西夏戰爭に際して歐陽脩は、漢制にならって才能あるものを精選し、中書・樞密の屬官とすべきを主張した（『歐陽文忠公集』106「論中書增官屬主文書劄子」）。戦時とはいえな

いまでも熙寧における王安石の意圖も、ほぼこれと共通するであらう。

中書檢正官の首席は檢正五房公事であり都檢正と略稱される。中書の五房（孔目・吏・戸・禮・刑房）にはそれぞれ二名の檢正官が配される。五房は制敕院ともよばれ、「都堂（中書）を中心とした政策審議・決定・詔敕・條制としての發布の原案作成の事務」をうけもつ、「國政に關するあらゆる制敕を取扱う中樞機關」である。<sup>(2)</sup>檢正官の序官は從來の中書の屬僚とは一線を劃す。都檢正は提點五房のうえに、各房檢正官は提點と同等、堂後官のうえに位置づけられる（『長編』115／1）。

自身刑房檢正官の履歷をもつ——自然科學にもわたる萬能の才人として著名な——沈括によれば、檢正官はなべて、各房二人の定員に對して一名の淨書係のほかは、いかなる事務上の屬吏も與えられず、あらゆる細務をみづから處理せしめられた（『夢溪筆談』2）。例えば都檢正にしても、その選任のなによりの基準が「吏文が精密である」かいなかであった（『長編』263／28など）のだから、彼らに「吏才」が不可缺であったのは疑うべくもない。

こうしてみれば中書檢正官の設置を、安石の「吏士合一策」の一環とみなすこともあるいは可能である。だが單に士人に「吏事」を行わせる、つまりは既存の提點五房や堂後官のうえに例えば進士科出身の士人をおき、彼らに從來胥吏に委ねた事務をとらせる、という意味での「吏士合一」では必ずしもない。ことばをかえれば、とりわけ安石における檢正官の職責は、中書各房の責任者として胥吏を統轄し、胥吏の姦惡を防ぎ自身の「吏才」を發揮して、五房の事務をより以上に圓滑に運ばせることで、全うされるものではない。とりあえずこれを傍證するのが、檢正官設置と同時に堂後官に下された措置である。選人（士人）からなることができた——さきの「學究」はこれに相當するであらう——堂後官へのルートが、この時に廢止された（『長編』215／1）のは、舊來の「吏事」は「倉法」等によって統制を強化したうえで、胥吏に一任しようとする意圖であらう。「吏士合一」という語から短絡的に印象されるのとは裏腹に、ここでは士人と胥吏との役

割が區別され、胥吏に一定の拘束を加えようとする傾向が、みえるのである。

特に舊法黨などの他者からみれば、檢正官にもとめられるのは舊にひとしい「吏才」であり、そのなすところも「吏事」にすぎまい。だが安石にすれば檢正官の「吏事」と「吏才」とは、政治のきわめて重要な要素でありながら故らに輕視されてきた高度な實務と、これに對應し處理する能力とを意味したはずである。従つて檢正官はその活動の範圍を、中書各房の責任者としてのそれに限定されない。むしろ制置三司條例司などによる大綱の企畫段階を経たあと、新法實施面の中核として、所屬各房の職掌を超越して活動すること、ときにこれがもとめられたのである。

もちろん檢正官が各房の文書事務を、一切取扱わなかつたわけではない。不斷に續けられる中書五房の日常的業務、士人一般からみて記録に價しない「吏事」は、これを無視するのが當時の史家の筆法であるから、その詳細はきわめにくないが、後出の御史蔡承禧の總括的表現にかりれば、「文字を點檢し文字を推行する」のが檢正官の基本的な職務である。「文字の點檢」とは具體的にどのようなものか。參知政事呂惠卿が檢正刑房張安國を戒諭している。「人主は天下の事を以て

中書に付し、中書は以て五房に付している。人主がすべての文書をみられるわけがあらうか。罪の輕重を問わず〔すべてを決斷の基準は〕中書〔の送る文書〕のみに依據しているのだ（『長編』268/13）。」下級官廳—この場合は大理寺である—の送付をうけ當該房の作成した原案を、最終的に點檢（檢正）して天子に進呈する、これが檢正官の基本的職務であらう。

だが史料に敘上の制約を認めたくえでもなおやはり顯著なのは、各房の本來的業務にたずさわる檢正官であるよりは、むしろその房に關わる部分の政治の缺陷を、摘出し改正しようとする檢正官の姿である。例えば檢正刑房李承之である。「今宋の刑法體系を特徵づける死刑判決（大辟案）に對する再審制度が、適確に機能していない現状を批判して彼はいう。「今から刑部に毎月、すでに覆しおわつた大辟案をすべて中書に上申させ、檢正官に委ねて覆詳させ、大事件は十日を限り小事件は七日を限りとする。……（『長編』219/3）」提案は實施されて年内に彼は、五件の大辟案を駁正したとして太常丞

（正八品）に陞進した（同226/11）。

熙寧八年（一〇七五）安石と呂惠卿の對立が表面化したとき、惠卿を彈劾させた黒幕は安石の息男であると伝えられるが（『長編』268／11）、實際の糾彈者は御史中丞鄧綰と、安石と同郷の御史蔡承禧（『宋史翼』40）である。安石の側近といえる承禧のことには、日頃の安石の主張がそのまま反映されていると考えられる。承禧はいう。「臣が詳たところ、朝廷が檢正官を置いた本意は蓋し、經術文雅であり、國體を謀るに足り、前人の言過去の事例に通曉して宰相を補佐することができ、〔宰相に〕知らない所があれば諮問することができる〔人材を〕、必要としたところにありましよう。文字を點檢し文字を推行するなどは、〔その職責において〕猶お下等に屬するものであります（『長編』266／9）。」豊かな古典的教養に裏附されて國政全般を議論しうる資質（足謀國體）——具體的には時世の洞察力・分析能力であろうか——をもち、史實あるいは故事に明るく（多識前言往行）、隨時諮問に應えうる該博な實際的知識（有所不知得以諮訪）を併せもつこと、これらを具えてようやく檢正官にふさわしいというのである。

行政文書操作の有能な技術者である以上の資質を、檢正官にもとめるこの姿勢は、熙寧の當路者に普遍的であろうか。安石のそれはさきの「宰屬」論議に明らかにみてとれる。「在下の豪傑の士を選んで條例を編修させ文字を點檢させるべきです。……〔中書に宰屬を置き例を修めさせる〕のは政治の根本であります。凡そ例を修めるものは、王體を知り國體を識り、流俗にくらまされるようなことがないものであって、はじめて任命すべきであります（『宋會要』職官5／8）。」「文字を點檢」させることも課題であるから、この「宰屬」構想はそのままの檢正官につながるとみてよい。「王體を知り國體を識る」とは、蔡承禧のいう「國體を謀るに足る」の典據でもあろう。

安石の姿勢は彼の與黨にあつて、共通の理解をかちえていたであらうか。宰臣曾公亮は、「宰屬」をおくそのことには賛成するものの、すでにみたように彼の理解は安石と大きく異なる。「學究」出身の「敦樸の人」、これを「宰屬」にすべきという彼からは、中書の現状改善の意志はあるいは窺いえても、政治全般の改革への意欲は感得できない。中書の重要性を認めて全般的改革への意志は明らかだが、神宗の認識にも隔差がある。「今〔天下の〕治まることを欲するならば中



書から始めるべきだ。中書に「宰屬」を置くならば小官を精選すべきである（同職官5／8）。右の安石の「在下豪傑の士」は、神宗の「小官」と公亮の「敦樸の人」に對する所信表明に外ならない。

公亮は論外であるとして餘の兩者の間の隔差は、檢正官設置の際にもあらわれる。「上は初め〔檢正官の禮遇を〕議したとき、執政と同席させまいとしていった。『今一諫官を任命しようとしてさえ適當な人材を得られぬ（現狀である）。

〔まして〕おそらく中書に〔宰〕屬を置くならば第一等の人材を得られないにちがいない。〔そうした小人たちであるから〕禮遇を抑制しておかなければ、〔宰相の〕權威を侵し事を害うであらう。』王安石はいった。『中書の屬官は、やがては諫官・侍従もつとめられるような〔第一等の人材を〕精擇しなければなりません。もしその禮遇を抑制すれば、自ら愛重する〔第一等の〕人は進んでことをなさうとはしますまい。〔抑制されてもなりたがるような〕自ら愛重しないものなればこそ、その招權害事を心配せねばなりません。』（『長編』113／1）檢正官を、二流以下の人材によっても賄いうる——行政文書の操作に限定されるべき——職掌と神宗はみなす如くである。たとえ現在の地位は卑くとも、將來國政を直接にないうる、檢正官にはそのような人材をあてるべしとの安石の主張である。政治の中樞における「吏事」をどのような人材に委ねるかはとりもなおさず、その「吏事」をどのように認識しているかに外なるまい。その間における差違はまた、あるべき政治の姿についての乖離にもつながる可能性がある。

いずれにもせよ、「敦樸の人」でもなく「小官」でもない、近未來における指導者集團ともなりうる「在下豪傑の士」を「宰屬」として、敢て他者からは「吏事」としかみえない實務を委ねる。しかもこれを政治の根本とみなすところに、王安石の政治が截然として、他と區別されるべき理由がある。

## 二 中書檢正官——新進官僚

王安石と檢正官による熙寧の政治史にはささやかな前史がある。例えば初代都檢正呂大防同じく吏房の李清臣は、安石

## 附 表

◎は新法黨政權（熙寧・元豐・紹聖・徽宗朝）の宰相。○は同じく參知政事・樞密使副。●は舊法黨（元祐）の宰相から樞副。

## ← 王安石宰相在位 (I) →

熙寧3年 (1070)	4年 (1071)	5年 (1072)	6年 (1073)	7年 (1074)
都 檢 正 (檢正五房公事) ● 9 呂大防	2 (戶房) 曾布	12 呂惠卿 曾布↓翰林學士		1 惠卿 參知政事 3 惠卿↓參知政事 (刑房) 李承之
吏 房 ● 9 李清臣	2 劉摯(?) 6 盧秉	2 盧秉↓兩浙提刑 提舉鹽事 許安世	12 張元方(習學) 孟	10 蒲宗孟 參訪荆 11 (吏房) 習學↓王
戶 房 ● 9 曾布	4 鄧潤甫 7 章惇 ○ 7 章惇	10 閻潤甫 參訪荆湖 同知審官東院	5 熊本 參訪梓夔 12 徐禧(習學)	5 (鄧潤甫) 知制誥 張諤
禮 房 2 劉摯(?) 4 劉摯↓監察御史裏行	11 許將 向宗儒 將↓直舍人院 張商英		5 (戶房) 章惇 12 葉適(習學) 3 章惇↓知制誥 5 (許將) 知制誥 6 (習學) 葉適	10 葉適 沒 曾伉
刑 房 9 李承之	11 承之 參訪淮南 沈括		3 承之 參訪陝西 12 王震(習學)	8 沈括↓知制誥 3 承之↓都檢正
孔 目 房 10 鄧綰	1 箱↓侍御史知雜事 ○ 蒲宗孟			7 (吏房) 許安世 參訪荆湖

## ← 王 安 石 (Ⅱ) →

(1074) 4 年		4 王陟臣(兼孔目房)↓度支判官		鐘世義(習學)	路昌衡	王陟臣
(1075) 3 年		蔡京			張商英	
(1076) 2 年				7 (刑房)↓王震(習學)↓蔡京		曾伉
元豐1年 (1077)		9 王陟臣↓權發遣兩浙提刑		9 崔公度↓同知禮院	12 杜紘↓判刑部	
(1078) 10 年	1210 承之↓權三司使 1210 承之↓都提舉市易司	(禮房)↓向宗儒	4 (孔目房)↓安燾    體量京東河北畢仲衍	◎ 7 蔡京(習學)	● (習學)↓范鎰 劉奉世	劉定  福建體量 安撫
(1079) 9 年	10 罷張諤		1110 罷練亨甫 司庫務 呂嘉問↓提舉諸			
(1080) 8 年	10 諤  淮南兩浙體量安撫 問4(戶房)↓張諤	9 孫諤(習學)	12 (熊本)↓知制誥	1 徐禧↓荊湖北運副 6 (監察御史裏行)↓徐禧 8 徐禧  察訪淮南	5 范鎰(習學) 7 張安國 范純粹 (習學)↓王震	○● 9 安燾 馬琬

ではなく彼の同僚韓絳の「宰屬」である。兩者は、熙寧三年（一〇七〇）九月韓絳が陝西宣撫使として特派された際その屬となり（『長編』<sup>215</sup>／6・『雞肋集』<sup>62</sup>「資政殿大學士李公行狀」）、現地で各々檢正を命ぜられた（『長編』<sup>215</sup>／14・<sup>217</sup>／2）。特に清臣は、慶州（陝西永興軍路）兵亂の責を問われて韓絳が―出使先で陞任していた宰相から―左降される（同<sup>211</sup>／20）のに殉じて、檢正官を辭している（同<sup>211</sup>／11）。彼はまた反青苗派の巨魁韓琦にもちかく、新法の熱烈な支持者とはいいいかねる（先掲『雞肋集』）。その點戸房に任ぜられてこれを辭した范育（『長編』<sup>211</sup>／3）、吏房となり（同<sup>210</sup>／3）のちに御史に轉じた劉摯はより鮮明に反新法的である。有名な鹽法改革者范祥を父とする前者は、思想的に張載（橫渠）・張戢兄弟や程顥の一類で、爲政者にはまず心術を正すことをもとめるなど、初期道學者のひとりである（同<sup>213</sup>／15・<sup>213</sup>／3）。劉摯は後年の元祐舊法黨の一派閥「朔黨」の領袖であり、彼の側の記録は、當時舊法黨人士の進退をのべる定型的ないいようで、その才を安石に認められて檢正官となったが、一月あまりの在任中多く議論は對立したと傳える（『忠肅集』<sup>4</sup>劉安世序など）。監察御史裏行となるや青苗・免役等の法の、彼はもつとも苛烈な糾彈者のひとりとなった（『長編』<sup>211</sup>／9・『忠肅集』3など）。均輸・青苗法などに續き免役法―その全國的頒下は四年（一〇七二）十月（『長編』<sup>215</sup>／7）―が行われようという時期、王安石新法がその全貌をあらわそうというこの段階では、舊法黨的意識の持主は、たとえ彼なりの改革を構想しようとして、すでにその當事者として政府にとどまりえない。まして韓絳去位（四年三月）以後宰相はただ安石ひとりである。劉摯という政權の不純分子が中書を去るのをまたず、神宗と安石の檢正官―およびその經驗者―からなる、眞に實權を行使する内局が政府のなかに形成されるという、熙寧に特徴的な構造があらわれてくる。

右の體制の告發者は御史中丞楊繪である。その發言の要點の第一は、朝廷の政令が某房檢正官あるいはただ某房という名儀でのみ、行下される點である。「一體に聖旨の指揮を奉じて頒下するものは朝廷の政令であり、諸房とは胥吏の部局名にはかなりません。今檢正官の名儀を用いるのさえ體を失しているのに、まして某房の名儀を用いたならば、天下の人はどこから命令がでるものか、怪しまずにおられましょいか。」要點の第二は、王安石と檢正官のみが政務を商議し、他

の大臣が埒外におかれるという点である（『長編』210/11-12）。楊檣の第二點は、呂大防にかわって都檢正となった曾布によっても明言される。「丞相（安石）がすでに議定しているのだから、彼（ら）參知政事馮京・王珪」に問うたとてなんにしろ。〔「裁可を経て」〕敕が出るのを俟ち、押字かきはんさせればそれでよい（同210/11）。御史轉任ののち局外の批判者の立場をえた劉摯も、役法が司農寺において、中書の屬官（曾布）と御史知雜（鄧綰）の手で講畫され、大臣（安石）が選擇した監司・提舉常平官によつて實施される現狀を論難し（『忠肅集』3「論助役法分析疏」）、政治一般についても次のようにいう。「凡そ政府（安石）が措置經畫、除用進退する所以を謀議するにあたり、ひとり一屬掾曾布なるものと論定し、それから落筆するので、同列〔の馮京・王珪〕が預り聞くのは布のあとというありさまです（同「第二疏」）。馮京ら參知政事でさえ政治に干預できないほどに、安石と曾布ら特定少數に實權が集中する、これが熙寧の政治の實態である。

劉摯らの批判に對して總體的な役法肯定論、反批判を展開する（『長編』215/2）など、寄祿階としては正八品の小官でありながら、すでに曾布の立場はあたかも與黨新法黨の幹事長のそれである。「開封府界の民にはそれぞれ差役と募役のいづれなりとも選ばせる」という趣旨の、聖旨を奉じた命令が下されようとしたとき、曾布——鄧綰——の代表する司農寺は、不適當としてこれをさしもどした。形式的にはほぼ同様の知制誥李大臨らの場合とは逆に、曾布らはなんの處分も蒙らなかつた（同213/12）。これほどにこの頃、政權内の彼の立場は、強固なものとなっていたのである。

異母兄曾鞏とともに嘉祐二年（一〇五七）の進士に及第した曾布の（『宋史』311・411）、この時期の詳細な經歷を楊檣はのべてもいる（『長編』215/11）。ここには曾布のみならず他の檢正官一般にも、共通するいくつかの特徴的な點がある。要約すれば第一點はその位階（寄祿階）に關わり、第二點はその兼任する職務に關わる。

①海州（淮南）懷仁縣令↓著作佐郎（熙寧二年九月）②看詳衙司條例（閏十一月）③編敕刪定官（三年四月）④編修中書條例（八月）⑤著作佐郎↓崇政殿說書・太子中允（九月）⑥權同判司農寺（同）⑦集賢校理（同）⑧檢正戶房（同）⑨看詳編修中書條例（十月）⑩直舍人院（四年二月）⑪都檢正（同）⑫詳定編敕（五月）⑬試知制誥（七月）

第一點においてまず注目すべきは、異常ともいえる陞進の速さである。比較の対象として同じ嘉祐二年の進士陳輔の經歷を参照する（『雞肋集』<sup>67</sup>「朝奉郎致仕陳君墓誌銘」）。彼は及第に際し校書郎（京官從九品）を授けられているから、第一甲の高位の合格者であつたと考えられる。その彼にして濱州（河北）司理參軍から始まる差遣は、三十餘年を閲したのちの知邛州（成都路）に至るまで一貫して地方勤務であり、位階もようやく朝奉郎（正七品末等）であるにすぎない。だがその生涯は、及第の際の授官という出發からすれば、龍頭蛇尾の觀はあるにしても、さりとて極端な挫折と冷遇の連續であつたわけではなく、官僚としてまずは無難な一生であつたといえよう。比べて曾布は、縣令という選人七階級のうちの第五等から、一躍高級官僚の身分を取得（入流）したばかりか、京官の最高位著作佐郎（從八品）をただちに與えられ、しかもさらに一階うえの太子中允（朝官正八品）に陞るまで、一年を要したにすぎず、知制誥となるや名譽ある諫官右正言をもえた（『長編』<sup>225</sup>／<sup>9</sup>）。著作佐郎に陳輔が到達したのは、曾布に數年おくれて熙寧八年のこと——彼が知安吉縣（湖州）のとき干與した呂惠卿派官僚張若濟の一件から——推測できる。

位階陞進の速さ自體はそれとして、この時期の曾布は八品官でしかない。官界ではいまだに輕輩である彼が、強大な權勢をふるいえたのである。なるほど宋の官界では、寄祿階は地位の上下と本俸の多少との指標にすぎず、卑い位階にあるものが相當の權力を行使しうる事例には、しばしば遭遇する。だが王安石のものと曾布の場合ほど極端に、位階と實權とが乖離するのは、絶無ではないにしても非常にまれである。

熙寧六年（一〇七三）におかれた檢正習學公事の例をもつてこの點は、曾布からさらに一般化できる。習學公事は檢正官のみならずであり、現役の檢正官は近い將來さらに高い地位を與えるという前提のもと、彼らの離任ののち即ちにその闕をうめるにたる有能の士を、いまから檢正官の實務に習熟させておくべきとする、王安石の意向に由來する（『長編』<sup>218</sup>／<sup>17</sup>）。例えば八年（一〇七五）に吏房習學に除せられた孫諤について楊時（龜山）は、「同列は皆な一時の選を極め、そのちに侍從に列なり要職に居ることとなるものがずらりといた（『龜山集』<sup>34</sup>「孫龍圖墓誌銘」）」という。最低限その「吏

才」はみな當時の一流であったといえよう。

習學公事はすべて選人身分である。なかには徐禧のように洪州（郷貢）進士という無位無官（白衣）の身から、就任してはじめて選人となったものもある（『長編』<sup>248</sup>/<sup>17</sup>）。練亨甫は新法黨のエリートコースを歩んだ。安石の子王雱の弟子であり、三舍制に改革された太學の外舍から第一位の成績で禮部試受験資格をえ、六年（一〇七三）進士科に合格したあと、王雱の集大成いわゆる新經義の修定にたずさわった（同<sup>247</sup>/<sup>16</sup>・<sup>244</sup>/<sup>8</sup>・『宋史翼』<sup>40</sup>）。わずかに二年後戸房習學となるや、睦州司法參軍でしかない（『長編』<sup>244</sup>/<sup>17</sup>）彼が、政權の兩巨頭の抗争のなかで、實質上の主役のひとつを演ずる。安石派の亨甫について一方の當事者呂惠卿はいう。「安石は」毎日ただ呂嘉問（檢正戸房）・練亨甫にかこまれている。……その餘の人は話しかけることもできない（同<sup>268</sup>/<sup>14</sup>）。「大抵〔御史蔡〕承禧が〔わが一黨を攻撃して〕いう所は、皆な亨甫が教唆している（同<sup>268</sup>/<sup>5</sup>）。」

黨争の面ばかりではない。習學公事亨甫の活動としては、科擧・教育制度に関わるものが資料に明らかである。他の習學公事（王震・孫譔）とともに貢擧（救）式の修定にあたった（『長編』<sup>268</sup>/<sup>1</sup>）外に、州學教官に對する試験制度の導入（同<sup>267</sup>/<sup>2</sup>）、從來適用の對象外とされた狀元以下三名にも、授官にさきだち法律試験の受験を義務づけよ、との提言も彼によってなされた（『宋會要』選擧<sup>13</sup>/<sup>18</sup>）。科擧（取士）は安石にとってやがては學校（養士）制度のなかに、解消されるべきものであったにしても、右の三者はいづれも、どのような次世代の官僚をつくるかという、安石の改革の根幹に関わるものといえる。一選人亨甫が改革において與えられた役割は、重要であったとしなければならない。

卑い位階の新進の徒が強權を握った例證であるのに加えて、習學公事は檢正官における安石の政治構想の完結でもある。彼らは周到に準備された檢正官の第二世代である。このお習學を一年つとめれば、入流させたいえ權檢正とすることとされた（『長編』<sup>258</sup>/<sup>10</sup>）。習學という窓口から有能であると同時に、まだ官場の習氣、舊法黨の影響に汚染されない——それは時に他者からすれば練亨甫・葉適のような、自派子飼の新進（同<sup>247</sup>/<sup>16</sup>）を權力に近づけ、宰相の地位を固める仕業

に外ならないが——人材を吸収する。その位階の卑さにこだわることなくこれに重要な實務の多くを委ね、材否を辨别して短期間に急速に陞進させる。このうゑに檢正・都檢正さらには侍從、最終的には宰相に至る經路を想定すれば、將來の國家の最高指導者層を一貫して、おもに外ならぬ「吏事」によつて試験しかつ養成しようとする構想が、ここにはみえてくる。<sup>(11)</sup>

### 三 中書への權力集中——檢正官の兼職

曾布の經歷から指摘できる第二點はさらに、(I) 既存の職任 (⑤⑦⑩⑬) (II) 法典編纂 (②③④⑨⑫) (III) 新法系諸官廳 (職) (⑥) の三者に大別できる。特に(II)(III)が重要であり、これを解明しおえたあとでは、あたかも既存の政治機構、權力體系が時の政府ではほとんど空洞化し、安石と檢正官を中心とする別箇の體系が成立しようとしていたとさえ印象される。

(I) まず彼らのおびる館職である。一般的に檢正官は集賢校理・館閣校勘を、習學公事は崇文院校書をおびる。下級であるとはいえこれらはいわゆる育材の地であり、位階も卑く資歴も浅い彼らを重用するに際し、權威を付與してその政治的地位の強化を期待できる。そのうゑこれら下級館職は、いずれも宮廷圖書館などの實務にあたる職事館職といふべきものである。<sup>(12)</sup> 諸文獻利用の機會をうることで法典編纂などの職務を、より圓滑に遂行できる、實際的效果をものぞみえたはずである。

特に都檢正には知制誥・直舍人院をおびる場合があり、一般の檢正官から知制誥に陞つたものもある。知制誥はもちろん、「中書舍人の事を行なう(『長編』383/21)」。直舍人院も——中書舍人が寄祿階に組込まれていた元豐以前には——宰相に直屬し官僚の任免狀(制誥)の作成にあたる。舊來とりわけ知制誥をおびれば、翰林學士さらには宰相への、最終的な候補者として登録されたのほとんど等しい。<sup>(13)</sup> だが安石がこれそれ自體におく意味は第二義的なものにすぎまい。短期的には都檢正——あるいは檢正官経験者——を宰相側近におく正當性が、既存の體制の範疇でも保證され、館職の場合同様その政



治的地位も強化できる。長期的には試験しおえた自黨の有能の士を、次代の指導者とする確率をより高めうる、などがそれである。例えば安石はいう。「制誥については適當な人材はたしかにえがたいが、〔制誥は〕政治において急切ではない（同231/4）。」

清要のきわみである翰林學士との對比によって、安石における「宰屬」の位置づけはより鮮明になる。服喪のあけた呂惠卿が都檢正となると、曾布の都檢正をやめさせようとした。安石は曾布の留任を固く請うていう。「兩人がそろって濟（たす）けてさえくれば、臣の愚短でも過（あやまち）が寡（すく）くてすみましよう。」曾布が翰林學士となると、安石はまた布の都檢正留任を請うが、神宗はいう。「學士の職任は高い。宰屬などをさせてはおけない。」せめて編修中書條例には留任させるよう請うが、惠卿の「吏文精密」を理由について聽許はされない（『長編』231/10）。中書條例の編修のような「吏事」を清官翰林學士にさせること、あるいは「宰屬」にすぎない都檢正が同時に學士であることは、安石にとってなんの矛盾でもない。もつとも優先されるべきは「宰屬」の充實でありできればその協調である。曾布以下はなによりも檢正官であるべきで、これに比べれば舊來の制における職任はいかに名譽あるものでも、あるいはその分實質から遊離するだけに、副次的なものとみなされる。

(II) 右の事例はまた政治の根本に行政府の刷新を、さらにその根本に「中書條例」という法典の整備をおく、安石の姿勢を再び想起させる。檢正官の編纂に係る法典の個別具體例は、『宋史』204藝文志に檢正禮房向宗儒の「南郊式」二十卷などいくつかみえる。『宋史』には採録されなかったもので、安石政權の財政姿勢を反映したであろうものに、「三司敕（令）式」がある。三年（一二〇七〇）末安石を總責任者として、「在京諸司庫務（諸財務官廳）歲計條例」とともに編修が命ぜられ、七年に「三司敕式」四百卷が上呈された（『宋會要』刑法1/8・『長編』231/4）。この間詳定官としてこれに干預したのは檢正戸房章惇と、これをついだ同じく張譔であり、曾布ものちに加わった（同225/21・245/2・246/14）。新法黨のてに

なる以上従來のものとは、意圖的にも結果的にも大きく異なっていたと類推しうる外に、詳細な内容は知るべくもない。ただ編纂の取沙汰された當初から、國家祭祀に伴う賞與などが減額される不安を、軍人が露骨に示しているから(同<sup>215</sup>／21)、冗費の大幅な節減が主要課題のひとつであったとは、推測できる。<sup>(15)</sup>

役法を除いた常平關係の詔敕が、『元豐司農敕令式』十五卷として集成されたのは同二年(一〇七九)のことである(『宋會要』刑法1／12)。熙寧三年(一〇七〇)、新法の多くが司農寺を頂點に運営されることとなって(『長編』211／10)以降、名は同じ司農寺ではあっても、新法の全てとほとんど等しい意味をもつに至ったその所管事項と、官廳自體の重要性とは、従前のそれと懸絶する。従って司農寺(＝常平司)關連の法典は全く新たに編纂されなければならぬばかりか、政治力學的にはその主導權を握るものこそ當代の眞の實力者に外ならない。右の元豐までの過程は新法黨内部の主導權の交替としてとらえられるのであり、その中心にいるのが呂惠卿<sup>(16)</sup>である。

三司條例司檢詳官であつた當初から彼は、隱然たる影響力を一部にもつていた(『長編拾補』6／18)。だが三年(一〇七〇)九月以降の服喪期間、司馬光によれば、彼に代わつて司農寺を主宰した曾布が彼の役法に重大な修正を加えた(『長編』215／2・215／6・215／7)。以後天下に頒下された役法は(同217／2)もちろん他の新法も多分に、惠卿構想ではなく曾布案を基礎として推進されたと考えられる。「均輸・農田・常平(青苗)等の敕は、すべて臣の手を経たもの(同268／8)」という自負が、惠卿にはある。であればこそ、翰林學士となつて曾布が判司農寺をやめるとこれに代わつた都檢正惠卿が、「遽かに天下の官吏に司農の未盡未便のことをいさせた(『東軒筆錄』10)」と傳えられるように政界復歸直後の彼は、新法を彼にとっての本來の軌道に戻すべく努めた。安石が一時掛冠した七年(一〇七四)、すでに參知政事である彼を責任者に、「司農條例」の編修が開始されたのはこの成果であらう。檢正戸房から彼を襲つた都檢正(判司農寺)李承之、戸房檢正(同判司農)張諤らが詳定官、惠卿の配下の經義所檢討官曾旼らが編修刪定官である(『長編』251／11・251／13・269／6)。法制上の體系化という新法の骨格づくりも都檢正あるいはこれを經驗した實力者と、檢正官を中心とした特定少數者によ

つてなされた事實を、惠卿のこの時期は象徴的に示している。

翌年復位した安石と惠卿との抗争は、當事者のみならず熙寧新法にも大きな影響を與える。まず惠卿の權勢が弱體化する過程で「條例」編纂の責任者を免ぜられ（『長編』<sup>267</sup>／7）、その失脚とともに編纂自體がやめられる（同<sup>268</sup>／8・<sup>269</sup>／19）。安石もまた失脚した九年末、前年編修の「常平等敕は允當でなく行用できない」ことを理由に再編の詔が下り（『宋會要』刑法1／10）、かくてさきの「司農敕令式」完成をみる。惠卿新法が否定しされたとみるべきであろう。これにさきだち惠卿「條例」の編纂中止と同時に、「事實を補<sup>なす</sup>けることがない」として「中書條例」の編纂もやめられる。安石の改革における根本方針にも重大な制肘が加えられたのである。安石の熙寧から元豐へ、政界は次第に轉換を始めた。

都檢正曾布が、仁宗末年以降の詔敕を集め當代施政の基本となる「熙寧編敕」<sup>17</sup>の、編纂にあたつた事例はすでにみた。檢正官の法典・法令における役割を、九年（一〇七〇）六月と七年七月のふたつの詔（『宋會要』刑法1／9）によって、ここではこれをさらに一般化する。前者では、「すべて刪（改創）立する條貫」の詳定にあたるのは、中書では舊によって、「都檢正・逐房檢正・監制敕庫官」であるべきと規定する。制敕庫は、「五房の文書を貯える」ための資料庫で都檢正がその責任者である（『長編』<sup>248</sup>／10）。特に八年八月以後は吏房習學孫諤が胥吏に替って監官となつた（同<sup>267</sup>／12・<sup>268</sup>／12）。後者は、中書・樞密諸房の創立刪改する「海行と一司條貫」は、刑法司・編敕所に送らなければならないとする。軍政（樞密）に関わるものとはともかく、安石が朝廷を去っている七年七月のその以前には、ならん第三者の手をへることなく、中書五房のみによって詳定から擬定・進呈までがなされる體制が想定できる。安石失脚直前の九年九月段階でも、少くとも詳定の手續きはこれを檢正官に委ねるものと確認されている。いいかえれば、當時の法令の相當部分が檢正官によってつくられたのである。とりわけ安石の指導力の安定している間は、檢正官は法令の編纂者であるばかりか立法者でもあつたことになる。

(四) 元豐官制改革によって巨大官廳三司が、ほとんど名目的存在でしかなかった戸部のもとに改組されるその以前、三司解體過程の一環として、司農寺に續き、「胄案を軍器監に歸し、修造を將作監に歸し」たと、馬端臨はいう(『文獻通考』52「戸部尙書」)。檢正官が兼ねる新法系官廳とおもにこの三者である。このうち檢正禮房向宗儒が、范子奇とともに長官(同判)になった將作監(土木建設擔當)についてはことに、知りうるところはすくない(『長編』211/1)。ただ蔡承禧はいう。「故に三司の財用は當然この〔軍器・將作〕二局によって大幅にへらされている(同211/15)」。三司の財源に甚大な影響を与えるほどの規模である以上、將作監の設立も軍器監同様、單なる分離であるよりは、三司の局外に既存の部局を機能を増大して再組織した、明確な政策意圖があつてなされたものであらう。

軍器監はいわば兵器廠である。從來胄案と諸州將作院が擔當した兵器製造は、當局者が數量充足だけを追究する日和見主義に終始し、ひたすら劣惡な製品が蓄積される現狀であつた。六年(一〇七三)に實現をみた設立の提言者は――李燾は否定するものの――王雱である。軍器監のもとに原材料產出の諸州には都作院<sup>(18)</sup>をおき、制作にあたらせる外、汎く兵器に關する意見を具陳させ併せてその式樣<sup>モデル</sup>をも募集した。嚴密な審査を加えたうえで式様に則つて製造させると同時に、製品の質についての責任も嚴しく問うた(『長編』215/21)。兵器製造體系を全國的規模で改めたのである。ほぼ二年後には、「〔品目によっては〕舊額に比べて數十倍から少なくとも二倍」の兵器を製造したと、報告されるに至つた(同214/12)。

判軍器監には都檢正呂惠卿と樞密都承旨――中書の都檢正に相當する――曾孝寬が任命され、屬官奏舉の權限も與えられた(『長編』215/21)。惠卿の在任は必ずしもながくはないが――參知政事陞任のためである――この地位には繼續的に檢正官の脈から判監が命ぜられた。知制誥章惇が彼の後任となり(同212/21)、以後熙寧年間で判明するところでは、權判として加わつた都檢正李承之(七年五月・同213/12)、章惇に代わつた知制誥沈括(同九月・同213/14)、沈括に代わつた俞充(同十一月・同213/9)の名をあげられる。とりわけ惠卿・承之は都檢正として、一部ではあれ行政權をも行使しえたのである。設立が中書の側の提言によるからであらう。軍器監のあるべき姿は樞密側の曾孝寬ではなく、呂惠卿によって次のように

語られるが、同時にこれは官僚の實務能力が、いかにあるべきかの要約でもある。式様の可否の決定は使用者側の、因習にとらわれ特になべて下僚に委ねるしか知らない、高級職業軍人によってなされてはならないとする。兵器については「盡く中外の所藏を觀」、法度については「盡く古今の所説を考え」、制作においては「必ず良匠の所編を究め」、施用に際しては「必ず邊臣の試る所を問ひ」うる、總合的調査能力とそれに依據する判斷力をもつ、軍器監(文臣官僚)でこそあるべきとの主張である(同<sup>19</sup>／2)。惠卿にみる姿勢のある限り軍器監は、いわゆる寺監のひとつであるにしても受動的な實施機關、兵器供給者ではない。軍備の實質向上をめざす能動的な改革の主體である。三司に屬した胃案が活性化され、軍政に關わる一部門として、檢正官人脈を通じ中書にむすびつけられたのである。<sup>(19)</sup>

司農寺はもちろん新法の中核である。熙寧における司農寺の長(判寺・同判寺)九名のうち三名(林旦・胡宗愈・張琥)は、檢正官でもその経験者でもない。ただ彼らの司農寺官としての唯一の記録は就任の事實を告げるものであり、のちの活動は資料にあらわれない(『長編』<sup>211</sup>／<sup>10</sup>・<sup>215</sup>／<sup>7</sup>・<sup>284</sup>／<sup>1</sup>)。この點は檢正吏房から、「甚しくは事を曉らざる(同<sup>500</sup>／<sup>14</sup>)」を以て他に轉じ、七年(一〇七四)に判寺を兼ねた李定にも共通する(同<sup>218</sup>／<sup>14</sup>・<sup>351</sup>／<sup>10</sup>)。檢正戸房から知制誥を経て(同<sup>211</sup>／<sup>3</sup>)熊本は二度判寺となった(同<sup>253</sup>／<sup>8</sup>・<sup>279</sup>／<sup>11</sup>)。だが彼の二度目の在任期間—九年(一〇七六)から元豐初年(一〇七八)—は、おもに惠卿・安石の失脚以後であり、その「司農敕式」あるいは「常平等敕」の編纂も、中書の影響を排除してすすめようとする意志に屈した形迹があるなど、檢正官経験者であるにしても、安石の熙寧體制的存在であるとはみなしがたい(『宋會要』刑法<sup>1</sup>／<sup>9</sup>・<sup>10</sup>、『長編』<sup>219</sup>／<sup>23</sup>)。彼以後元豐初年以降は、熙寧新法の實施面にはほとんど寄與していない、蔡確が判寺となり(同<sup>288</sup>／<sup>7</sup>)、檢正官と司農との關係は斷絶する。

鄧綰の存在は注意を要する。檢正孔目房就任から三箇月のちには侍御史知雜事に轉じ判司農寺を兼ねた(『長編』<sup>219</sup>／<sup>2</sup>・<sup>7</sup>)。判寺としての彼が曾布とともに、熙寧前半期の新法を精力的に推進した事實の一端は、すでに劉摯・楊檣の批判に窺える(本文65頁)。のち中丞に陞り安石失脚まで在任した通算八年という期間は、特異なこととして同時代人が記録する

(同<sup>230</sup>／2・278／2・『聖史』上「任人」)。これも曾布と「熙寧編敕」等の詳定にあたる(『長編』247／1・5)など、すでに監察機關の長としての職掌を逸脱している如くであるが、その罷免のときにも戸房習學練亨甫との交通を取沙汰され(同<sup>218</sup>／1・4・12)、安石と惠卿の抗争に際して後者の彈劾にたつ(同<sup>218</sup>／8・12)など、彼はほぼ一貫して安石の與黨である。政權の批判者としての臺諫集團、これが北宋の通例である。御史が政權の檢察官でもあり、行政面の構成員にもなるという鄧綰の例は更めて考察を要する(同<sup>218</sup>／11)。檢正官という面からみれば、これに選任した特定少數者を通じて中書に權力が集中する、彼は恰好の一例でもある。これを嫌ってか安石失脚後、檢正・習學の臺諫への奏舉が禁じられ、監察と行政の峻別が意圖されている。檢正官創設以前に判寺となつていた呂惠卿はともかく、曾布・惠卿・李承之・張諤の四代の都檢正全てにとり、都檢正であることは即ちに判司農寺であることも意味した。もちろんさきにもたように他者の併任もありはしたが、それも時には檢正刑房李承之が權同判として(『長編』247／13)惠卿と、戸房張諤が同判として(同<sup>218</sup>／9)承之と組合されたように、檢正と都檢正の併任さえあつた。これからすれば司農寺は純然たる中書の一部局であり、新法行政は宰相一箇に直結する構造であつたといえる。また將作・軍器・司農の三寺監を通じてみれば、これが元豐官制の先驅形態であるかは措くとして、官僚機構(三司)の少なくとも一部が中書のもとに再編され、中書はその意志の確實な實施機構をも包含したことになる。しかも外路の官僚は―檢正官の出使である場合が多い―察訪使や、監司による監察の結果を檢正官に掌握された<sup>(22)</sup>。宰相への權力集中の構圖はますます明らかである。

司農寺における安石の意圖は義勇保甲(民兵)において確認できる。熙寧八年(一〇七五)知制誥沈括以下檢正官四人を含む十三人が、河北・河東(山西)の四十七州軍の各々二七州軍を分擔し、その地の提舉義勇保甲となつた。前年來河北等の民兵教練は沈括と曾孝寬のもと、各地監司官・安撫司官が責をおつていたが、相位に復した安石は全て司農に統轄させたいと希望した<sup>(23)</sup>。十三名の任命はこれに難色を示した神宗の妥協的措施である。當時中央では判武學顧臨・判兵部檢正孔目房馬琬が、義勇保甲の責任者であつた。安石は二者に替えて檢正戸房判司農寺の張諤をあてようとする。「獨り臣が<sup>わたくし</sup>

勘議した」當初はともかく、現在兵部管轄下の義勇保甲は、「兵事であるから中書の關知するところではない」としながらも、「樞密院と曲直を争いうるもの」を主判とするのでなければ、「法は立ち難い」という（『長編』255／11・257／4・263／1～2）。結果的には司農に兵部をかねさせたくない神宗が、安石に近いとはいえ樞密都承旨の、曾孝寬を判兵部として一旦落着するが、半年後には、「保甲は民兵であり司農寺に屬すべきではない」という兵部の胥吏に藉口して、提舉官十三名もやめられ（同268／10）、これに對する中書の影響力は排除される。樞密院など他勢力という阻礙要因除去のためであれ、判司農寺（檢正官）を介してこれが中書に結びつくならば、行政の効率化をめざして中書の改革・條例の編纂から始めた安石は、行政・財政そして軍政の一部さえ一元的に掌握することになる。少なくとも他者、とりわけ神宗はそう理解したであろうし、<sup>(24)</sup>政治における合理性の必要が命じるならば、安石もこれを妥當として疑わなかったであろう。

#### 四 神宗親政下の檢正官

「宰屬」における「在下豪傑之士」と「小官」というその位置づけから始めて、神宗と安石の黯黙裡の對立點を隨處に示してきた。果して神宗が親政してのち檢正官にはいくつかめだった變化がある。まず安石失脚の直後、彼らの兼職を禁止する詔が下った（『長編』279／2）。これによって例えば司農寺の長として行政權を直接行使しうる存在では、檢正官はありえなくなった。いいかえればその職掌は、基本的には「宰屬」としての事務に限られ、宰相の指導力自體も熙寧以前の既存の系路でしか、發揮しえなくなった。辭句に直接表現されはしないがこれは、親政開始—安石政權終息—の宣言にはかならない。

元豐元年（一〇七八）には檢正官の定員が削減された。各房二名計十名から四名への削減である（『長編』282／7）。四名が五房にいかにか配分されたかは必ずしも明らかではない。「戸房二員が舊の如くである外、孔目房・吏房・禮房は共計一員である（同288／11）」との例から推せば一員が孔目以下三房を兼領したものであろうか。<sup>(25)</sup>四名の少數で行政に重大な支

障がなかったとしても、熙寧の十名が過剰であったことにはならない。十名の數はかえって檢正官が當該房の文書處理とともに、内外の差遣を兼務したことを示すからである。この削減措置は熙寧の制を否定した當然の歸結である。

安石失脚直後一般の檢正官に對し、文書を諸處に行下するには執政の許可を要するとの、制限が加えられた（『長編』<sup>278</sup>／11）。參知政事への最終階梯でさえあった都檢正の、官界での地位も著しく低下した。例えば參知政事以上に許されたのと同様、「劄子を用いて政令を出」しえた特權が剝奪された（同<sup>280</sup>／1）。元豐五年（一〇八二）の官制改革まで檢正官の制は、少なくとも存続した。だがこれより五年前すでに都檢正の存在自體が、全く曖昧になってしまふ。張諤罷免（同<sup>278</sup>／13）後李承之が再任される（同<sup>280</sup>／23）まで、四箇月の空白期があったのも尋常ではないが、承之を繼いだ俞充が都提舉市易司に專任するために、都檢正をやめた事實をつけて李燾はいう。「誰が充に代わって都檢正となったかわからない（同<sup>280</sup>／1）。熙寧ではまずありえない事態である。」<sup>(26)</sup>

安石以後の檢正官が質的に劣るというわけではない。例えば畢仲衍である。彼は安石の後任吳充によって檢正刑房に拔擢され、やがて戸房に遷った（『西臺集』<sup>16</sup>「起居郎夷仲行狀」）。元豐三年（一〇八〇）檢正禮房王震とともに檢討文字官として、元豐官制の詳定に參加し（『長編』<sup>280</sup>／1）、戸部に關わる部分を擔當した。「行狀」の語であるからそのままにうけとれぬにしても、「戸部の老郎吏でさえ乗すべきすぎがない」有能ぶりで、ついに官制についてはすべてを委ねられた（先掲『西臺集』）。その彼の戸房當時の、後代にまで著名な業績が『中書備對』の編纂である。その實務能力がいかに用いられたかという點で『備對』は、元豐の檢正官を象徵する如くである。元豐初頭に編纂の命が下され（『長編』<sup>287</sup>／16）、結果的には同三年（一〇八〇）仲衍單獨で上呈した。その基本的性格はこのときの、仲衍と神宗の語に窺える。「〔中書には所謂會要が備附けられていないので〕決獄・錢穀の下問につきお對えできないことが」あるから纂修させられた、「臣下が君問に備えるための書」、これが『備對』である（同<sup>307</sup>／5）。時の官僚にとって必要な統計數字など、財政・法制上の實務に關する基礎的事項の集大成であり、下問に答えるためのいわば虎の巻に外ならない。しかも編纂のそもその契機は吳



充にある。「聖問が多く意表に出るので此の書を爲ることを請うた（同131/17）」のである。その縁戚でありながら樞密使のとき、安石批判を繰返したことを認められて彼は宰相をえた（同131/10）。だが一貫した政治構想、これから派生する實務の重要性の認識、實務に關する一定以上の知識のいづれにおいても彼と前任者とは比較になるまい。上前を取繕うのに『備對』の必要を覺える宰相と、彼に甚しくは面目を失墜させまいがために精力を費す檢正官、彼らが構成する行政府にはすでに、ひずみのみえ始めた國家をいかに再建するか、の抜本的方法を模索し、かつこれを實行する意志と活力においては、多くを期待できない。吳充・王珪という元豐の人事からも、宰相と中書を君主の意志の忠實な實行者に限定し、自らの指導性を徹底させたい神宗の意圖が露骨にみえてくる。

#### 結語にかえて

一貫性ではなく政治的斷絶を熙寧と元豐との間に認め、これを明言するものは宋人にまれではあるが皆無ではない。安石の後繼者を自負する蔡卞——門下生であり女婿である——は、配下に太學で公言させていう。「神宗は王荆公（安石）を理解しきれなかった。滕文公の孟子を理解したのにも及ばない（『長編』43/10）」。安石の熱烈な支持者として熙寧政權に参加した常秩の行狀等には、ほとんど全面的な親政否定の語がある。「荆公が去位してより天下の官吏は陰かに新法を變え民は荼毒をうけた」「上下循環し敗端が内に萌したがさとするものはいない。公（秩）が獨り見て其の必敗を知るに幾かった」（『長編拾補』13/12）。二者と對極的な立場から陳瓊が、母后宣仁の權威をもって元豐までも一概に否定した司馬光を、非とする論據は、「元豐の政は多く熙寧に異なる。だとすれば先志が已に變わりこれを實行した」からである（『長編』43/11）。

兩代の差違を明らかにするためには、新法個々の嚴密な對比は必要である。だがすでに、政治の中樞である變質がおこったことは認めえた。行政の効率化をもとめるが故にまず「條例」を整備し、檢正官を通じて中書に行政權力を集中する

方針は、否定された。政治における「吏事」はその重要性を十分には理解されず、「吏才」は従來の「吏事」の範疇で用いられた。安石が改革のもっとも根本的部分としたものが、受容されなかった。にもかかわらず蔡下を敷衍すれば、安石を理解しおおせたものとして、北宋の君主獨裁制の成立以後にはなかった、親政が開始された。元豐をみずに没した常秩の「敗端」がなにをさすかは知るすべもない。ただ、親政であるが故のその不可侵性の弊害が、宋代士大夫に及んだとは考えられる。元豐への疑念を誘發しうる兩代の客觀的比較検討は、實質上封じられた。地位の保全を優先する大多數にとっては特に、國家に現在にが必要かという柔軟な思考に基づく議論を、公然と展開できる餘地はせばまり、國政の場でのその政治的責任感・公的使命感の自由な發現は、果てしなく困難になった。黨争の激化と社會全體の硬直化傾向が、症狀をさらに昂進させる。極論すれば、元豐を無批判的に容認するのではなければ、單なる量的擴大と形式的模倣をもって熙寧の繼承とする蔡京か、諸惡の根源を熙寧に歸し安石のみに攻撃目標を指向する陳瓘か、いづれかの選擇しか許されなかった。かくて國家權力（官僚機構）を通じて全般的な社會改革を、なしうると妄想する近世士大夫は安石をもっておわった。門閥でもなく外戚でもない一知識人は、彼が當代最高の知性であるただその故に、その學の成果を政治の場において汎く實踐しえた。だが、確かにその學を手段に榮達する人々と、公的典例等における尊崇とは恵まれはしたが、彼の新法が正しく繼承されかつ發展する可能性は、奪われたのである。

## 註

- (1) 宮崎市定『科學』（一九四六、秋田屋）三三頁。
- (2) 梅原郁『宋代官僚制度研究』（一九八五、同朋舎）五一—五二頁。中書五房については梅原氏の解説のほかに、『宋朝事實類苑』25にその概略をしるす。
- (3) 檢正官を経て宰相・參知政事・樞密使等になったものは附表に示した。
- (4) 神宗が安石の妹婿朱明之を檢正官に推したが、安石がこれを迴避した結果劉摯が選ばれたというのが真相であろう（『長編』220／3）。
- (5) 『邵氏聞見錄』13に基づく。
- (6) 『長編』225／12は、「大臣之親中書之屬官」に作る。
- (7) 梅原前掲書二四〇—二五頁。

(8) 以上の官僚の位階については、「宋初の寄祿官とその周邊——宋代官制の理解のために——」（梅原郁『東方學報 京都』48）によった。

(9) 張若濟の彈劾されたのは安石の復相（八年二月）以後のことである（『東軒筆錄』5）。

(10) 宮崎市定「宋代の太學生生活」（『アジア史研究』一九五七、同朋舎）。

(11) 王安石の法律重視の姿勢を反映して刑部詳斷官、大理寺詳覆官の下にも習學公事がおかれた（『宋會要』職官24/5）。

(12) 梅原前掲書第四章「宋代の館職」。

(13) 同六九頁。

(14) 「令」についてはなお編纂が繼續されたと考えられる（『長編』251/14）。

(15) 後述するようにこの時期すでに三司の解體が進行しつつある。財政官廳再組織の意圖もこの編纂に盛込まれたと考えられる。

(16) 呂惠卿については周寶珠「略論呂惠卿」（『宋史研究論文集』一九八二、上海古籍出版社）がある。

(17) 同「編敕」の上呈は六年（一〇七三）八月であり熙寧末には重修が始まる（『宋會要』刑法1/9・10）。

(18) 全國の都作院は四一處、一七處が中央上供の軍器、二四處が當該路分使用の軍器をつくった（『淳熙三山志』18「都作院指揮」）。

(19) 安石在任中には、軍器・將作監が三司の錢物を許可された以上に消費しても、三司はこれを「點檢」できなかったよう

である（『長編』211/6）。両者が實質上中書直屬の機關にちかかったからであろう。

(20) 胡宗愈は知諫院（『長編』211/10）、林旦は監察御史裏行（同215/7）、張琥は侍御史知雜事（同214/1）で判寺を兼ねた。神宗には中書の獨走を牽制したい意圖があったものか。

(21) 司農寺が天下の祠廟を民間に「買撲<sup>ばいぼく</sup>」させて利潤を計り物議をかもした。これにつき魏泰は、「故凡司農起請、往往中書即自施行、不由中覆」という（『東軒筆錄』6）。両者は實質的に一體化していたといえる。

(22) 拙稿「熙寧年間の察訪使——王安石新法の推進者たち——」（『集刊東洋學』58）。

(23) その以前には諸州の管勾常平官が「管勾點檢」したが（『長編』249/1）、中央から司農寺官が出張して教練を監督することもあった（同215/6）。もし沈括以後監司等が介入する體制に改められたのだとすれば、彼が安石に「壬人」と呼ばれた（同261/2）理由が、このあたりに在る可能性もある。

(24) 熙寧五年（一〇七〇）には安石の側近郭逢源が、「當廢去樞府、併歸中書、除補武臣、悉出宰相。」と主張した（『長編』235/24）。神宗がこれによって安石への、警戒心を惹起された可能性はある。神宗が意識的に反安石の大臣を朝廷に残置したと、曾布はみなす。「先帝聽用安石、近世罕比。然當時大臣異論者不一、終不斥逐者、蓋恐上下之人、與安石爲一、則人主於民事有所不得聞矣。」（同483/5）

(25) 「檢正中書孔目房吏房公事王陟臣」などの例もあるが（『長編』311/17）、「孔目房曾伋」（同289/4）、「禮房王震」（同299

／10」など單一の房名を冠する場合もあり、詳細は不明である。

(26) 兪充以後では、「檢正五房公事、覆考到試中刑法出官人

(『長編』<sup>289</sup>／15)」の一例のみがみえる。「五房」は「刑房」の誤りか。資歷の深い一人が都檢正を兼ねた可能性もある。

**SECRETARIAT EXAMINERS 中書檢正官**  
**—Supporters of Wang Anshi's Administration—**

KUMAMOTO Takashi

Above all Wang Anshi possessed rationality, a characteristics of Northern-Sung scholars. When we try to throw light not on his individual policies, but on the administrative procedure controlling them, 'Secretariat examiners' supply us with instructive information.

They were first-class scholars, not only well-educated, but also competent to conduct business efficiently. Through them, Wang Anshi held actual power over the government. It is worth mentioning that each of the general directors of the Court of National Granaries 司農寺, which promoted the New Laws, concurrently held the post of 'Secretariat examiners', and that almost all the statutes were announced by way of them.

However, centralizing power on the prime minister in order to increase administrative efficiency brought about friction with the absolute monarchy. After Wang's downfall, when Shentsung himself controlled the government, 'Secretariat examiners' were no more than clerks. The rejection of Wang's rationalism shows the limits of 'progressiveness' in late imperial China.

**THE RISE AND FALL OF THE CAO KUN 曹錕—**  
**WU PEIFU 吳佩孚 FACTION**

MATSUO Yoji

Wu Peifu was admired as a "Revolutionary general" in the period of the May Fourth Movement. But after only a few years, in the period of the National Revolution, he became the biggest counterrevolutionary, and was defeated by the National Revolutionary Army. What brought about this military-political fall of Wu Peifu?

By introducing the idea of a 'Strategy of Unifying China' and in-